

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	柔道部 : 部報
Author(s)	速司, 彦二
Citation	龍南, 2 2 2 : 1 0 5 - 1 0 6
Issue date	1932-07-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7079
Right	

増 山(京大) 6 6 0 0 干 坂(五高)

増 山(京大) 6 6 1 0 松 尾(五高)

(増 山(京大) 6 6 3 3 (干 坂(五高)

六月七日京大庭球部の一行は「余りに奇麗すぎる、もつと粘りを與へ」の評を残して歸つていつた。

一方交渉中であつた原級留置學生のインター・ハイ出場問題は遂に不可能になり一同悲嘆に暮れたが來るべき來年度の黄金時代を目ざしてゆつくり練習する事になつた。

尙本年度の出場チームは石橋君と他皆ニュー・メンバーで大會に参加する事になるであらう。

以上の様で或ひは豫期の成績をあげ得ないかも知れないが、しかし倒れて後止むの覺悟でベストを盡すは勿論で、唯僕等としては母校、先輩の名を辱かしめない事を斷言しうると思ふ。

柔道部

速 司 彦 二

敗戦の悲哀辛苦の一年も通り、再び息詰まる夏が訪れた。眞に我々に取つては汗と涙の夏であり、希望と興奮の夏である。清涼の夏を味ふためには、大切な大任が横つてゐる。

我々にシーズンの別ちはないけれども、一年の勞苦錬磨の成果が現れ、勝利の美酒に酔ふか敗慘の悲嘆に沈むか、七月の高専大會こそ我等が眞に最高潮のシーズンである、年一度の大會であるだけ、一年の長き雌伏、準備の期間と共に我々に一層の緊張と覺悟とを與へ愈々輝しき貴い大會なのである。幾多先輩の残した輝しい傳統の力を示さんが爲に、と全ては忍ばれ、錬磨の限りを重ねて行くのである。力足らざる來る年も、こゝ二年はあたら敗退の不運にあり、我が傳統の覇は新興勢力の奪ふ所となつた凋落の感悲痛に我が胸を衝くのである。興亡は世の慣ひ、とは云へ、向上を志し専らの忍苦辛

酸の足るあれば覇も亦難からず、能く優越を保持する事が出来るのである。爲して悔いざる勞苦さへあれば假令ひ敗の不運はあるも、亦自ら新なる希望と意氣とを以つて奮然として立ち得るのである。凋落に沈みし時の部の姿と云へども決して悔を残す事はなかつた。完全なる部精神に生きつゝ、團結一致寒暑、晴雨の別なく輝しき先輩の戦績を保持せんがために汗と喘の苦行を重ねて行つたのであつた。己のが努力と苦闘の限りを盡せば、勝敗の成果は全て天運に任せ、不斷貯へし實力の完き發現に専心する事、之れ我が部精神であり全ての運動精神の尊き根幹であらふ。優越を望みて止まず、苦節の鏖磨而して悔いざる奮戦これが尊き運動精神の過程である。即ち徒らなる勝利の幻夢のみが我々運動精神なのでない。専らの辛苦の跡こそ唯一の感激であり、心の満足であり、部生活の眞髓である。

我々は戦に敗れた然し最も尊い部精神の發揚に悖る所はなかつたのであつた。

今や新に新入精鋭を迎へ一昨夏の非運の嘆を深く秘め

て、我が部は往年の優越を奪回せんとたゞ復讐征覇の念に燃えて居るのである。果して一年の苦鍊よく勝を得るか否か？それは未得知の事であるけれども少くとも我々は躊躇逡巡する事なく堂々對戦するだけの膽と自信を有してゐる。我々は覇を憧れてゐるだけに苦行も積んで來た。今や我々は喜んで敵を迎へ戦ふ事あるのみである。

大會を寸前に控えて敢えて己が力を自負する事は抑々の誤りである。同様に亦自己の力を敢えて疑ひ、萎縮退嬰する事も大なる間違である。悔いざる鍊磨を積んだからには力の有るがまゝに恐れず堂々陣を進むべきであり否むしろ敢えて敵を飲むの氣慨こそ能く大敵を倒すのである。

再生の意氣に奮ひ立つ我が部は必ずや、古の傳統を蘇らせ勝利の榮冠をかざすべく、江湖の龍南諸兄の熱き愛部必に對して報ゆるであらふ。

競 技 部

去る五月二十九日水前寺にて舉行せられました第五回